

外国人のための

基本語用例辞典

DICTIONARY OF BASIC JAPANESE USAGE

FOR FOREIGNERS

外国人のための
基本語用例辞典

DICTIONARY OF BASIC JAPANESE USAGE
FOR FOREIGNERS

文 化 庁

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

外国人のための 基本語用例辞典

昭和46年 8 月15日 発 行 定価 3,600 円

著作権所有

文 化 庁

郵便番号 100

東京都千代田区霞が関3の2の2

(581)4211

発 行

大 蔵 省 印 刷 局

郵便番号 107

東京都港区赤坂葵町2番地

(582)4411

(販売所裏面)

落丁・乱丁はおとりかえします

刊 行 の こ と ば

近年、海外では多くの国々に日本語教育機関が設けられ、また、諸外国から日本に留学して日本語を学ぶ者が非常に増加した。

文化庁では日本語教育の充実・発展のために種々努力を重ねており、その施策の一つとして、教材・資料等の充実・整備のために意を用いてきた。

この「外国人のための基本語用例辞典」は、既に刊行した「外国人のための漢字辞典」および「外国人のための専門用語辞典」とともに、日本語教育における最も基礎的な資料作成の試みの一つである。日本語を学ぼうとするあらゆる外国人にとって、どうしても身につけなければならないと思われる基本的な語を集め、その活用・意味・使い方などを解説するとともに、きわめて豊富な具体的な用例を示して、日本語教育に役だつことを意図したものである。

この辞典は、ただ日本語を学ぼうとする外国人が学習する際に活用・利用することをねらっているばかりでなく、日本語教育に携わるかたがたにも、広く活用されることをねらいとしている。

この辞典の編集・作成にあたっては、日本語教育の専門家を委嘱し、採録すべき語の選定をはじめ、企画・執筆・編集・校閲、その他万般にわたって御協力をいただいた。

この種の辞典は初めての試みであり、それだけに何かと不備な点もあるかと思うが、これを土台として、今後さらに充実した内容のものが生まれることを期待するものである。

刊行にあたって、関係の多くのかたがたの御尽力・御厚意に深く感謝の意を表するしだいである。

昭和46年3月

文化庁文化部長

吉 里 邦 夫

この辞典の内容（ねらい）

- 1 この辞典は、日本語の中で特に基本的であると思われる語を中心として解説し、適切な用例を付して、外国人学生の日本語学習の効果を高めるのに役立つことをねらい、かねて、教師が学生を指導するのにじゅうぶん利用できるように意を用いて編集したものである。
- 2 本書を使用する学習者は、日本語を500時間内外学習した外国人学生、およびそれ以上の日本語の学力のある者とする。
- 3 本書は学習者の立場から見れば、これまで、それほど広く、また厳密でもなく学習した基本的な語の意味・用法を再確認するとともに、さらにそれらの語についての認識を広げることがをねらいとする。したがって、500時間ぐらい学習した程度の者にだけ利用されるのではなく、それ以上の高度の学習者にも大いに役にたつものである。
- 4 本書を使用する学習者の程度を考えて、あまり特殊な意味・用法には及ばない。
- 5 基本語として採録した語は、日本語の学習書や諸種の語彙調査などに見られるものを資料とし、その中から日本語学習の初級の段階において出あうことが多い、かつ必要度が高いと考えられるもの約2500語を編集委員会で選定した。
その際、語の構成要素に注意を払い、基本的なものはできるだけ採録し、未習の複合語などを理解する応用力をつけるように意を配った。
- 6 本書には、採録語を解説する本文と、本書の使い方を説明するまえがきのほかに、次のような付録を用意した。
 - (1) 日本語の文法
 - (2) 語の構成法
 - (3) 親族関係のよび方
 - (4) 数えることば
 - (5) コソアドについて
 - (6) 擬声語・擬態語について
 - (7) 漢字音訓表
 - (8) 索引

用例辞典の構成およびその使用法

I 見出し語

1 見出し語の書き方。

見出し語はひらがなで書いてあります。しかし、外来語などかたかなで書くのがふつうの語は、かたかなで書いてあります。その書き方は、現在行なわれている標準的（ひょうじゅんてき）な書き方によっています。したがって、次のような語は、ひくときによく気をつけなければいけません。

例 おおきい〔大きい〕、おとうと〔弟〕、せんせい〔先生〕、つづく〔続く〕

2 活用語*¹の書き方。

見出し語が動詞・形容詞のときには、語幹*²（ごかん）と語尾*³（ごび）の間に「・」がつけてあります。したがって、動詞でも「する」「来る」「見る」などのように、語幹と語尾の区別（くべつ）がない語にはつけてありません。

例 か・く〔書く〕、お・きる〔起きる〕、とりあつか・う〔取り扱う〕、ちいさ・い〔小さい〕

形容動詞は語幹だけを見出し語としてしめしてあります。

例 きれい、にぎやか、しずか

助動詞も、語幹と語尾の区別のある語は、その間に「・」がつけてあります。

例 さ・せる、な・い、よう・だ

*1,2,3 は付録「日本語の文法」をみなさい。

3 見出し語のならべ方。

見出し語は五十音順（じゅん）（あ・い・う・え・お・か・き・く……の順）にならべてあります。そのとき、ひらがなとかたかなによる区別（くべつ）はしてありません。そのほか、次のことに注意なさい。

㊦ 濁音（だくおん）を表わすかな（が・ぎ・ぐ……、など「ゝ」のついたかな。）や半濁音を表わすかな（ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽ）は清音（せいおん）を表わすかな（「ゝ」や「゜」のついていないかな。）と同じように扱（あつか）いました。しかし、それらがつづくときには、清音・濁音・半濁音の順にならべてあります。

例 「は〔葉〕」と「ば〔場〕」とでは「は」のほうが先です。

「はち〔蜂〕」と「ばち〔罰〕」とでは「はち」のほうが先です。

「はっと」と「ぱっと」とでは「はっと」のほうが先です。

- ④ 促音(そくおん)を表わすかな(「がっこう〔学校〕」「きって〔切手〕」などの小さい「っ」や拗音(ようおん)を表わすかな(「ちゃ〔茶〕」「きゅう〔急〕」「きょう〔今日〕」などの小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」)も促音や拗音以外の音を表わすかなと同じようにあつかいました。しかし、それらがつつくときには、促音や拗音を表わすかなのあるほうがあとにならべてあります。

例 「いつか〔何時か〕」と「いっか」とでは「いつか」のほうが先です。

「しょう〔使用〕」と「しょう〔小〕」とでは「しょう」のほうが先です。

- ⑦ 外来語など、見出し語がかたかなで表記されるときに、長く伸(の)ばす音を示す「ー」は、それが全くないものとして扱(あつか)ってあります。したがって、「スカート」は「スカト」, 「ノート」は「ノト」と考えてひかなければいけません。

4 見出し語の漢字表記。

- (1) 表記のしかた。

見出し語がふつうは漢字で書き表わす語である場合には、その漢字表記を、「〔 〕」に入れて、見出し語の次に示してあります。

例 ほん〔本〕。よ・む〔読む〕。

したがって、「〔 〕」に漢字が示していないものは、ふつうは漢字で書かれることのない語です。

一つの見出し語に二つ以上の漢字表記のあるときは、その用法の一般的(いっぱんてき)なものから特殊(とくしゅ)なものへと順(じゅん)にあげてあります。(その使い分けについては、意味・用法を説明したところや、用例などで注意しているものもあります。)

- (2) 表外漢字の扱(あつか)い。

漢字表記は、当用漢字であって、しかもその音訓表の範囲内(はんいない)で使用できるものを示すようにしてあります。しかし、社会で広くふつうに漢字表記が行なわれているものは、当用漢字ではあるが、その音訓表で読み方がみとめられていないもの、また、当用漢字以外の字も、それをしめし、その字の上に「ゝ」をつけました。

例 あいさつ〔挨拶〕。あきら・める〔諦める〕。

- (3) 送(おく)りかな。

送りがなは、現在その標準(ひょうじゅん)とされているつけ方によっています。二つ以上の送りがなのつけ方が考えられるときには、略してもよいものを「()」に入れてしめました。

例 あかり〔明（か）り〕

5 品詞名*4。

(1) 品詞名のしめし方。

見出し語（漢字で書ける語は、その漢字表記）の次に、見出し語の品詞名が「〔 〕」に入れて示してあります。

例 いしゃ〔医者〕（名詞）

うご・く〔動く〕（動詞）

きっと（副詞）

ただし、一つの見出し語が二つ以上の品詞として用いられるときには、「Ⅰ、Ⅱ、……」と分けて、それぞれに品詞名がしめしてあります。

例 ほん〔本〕

Ⅰ （名詞）……………

Ⅱ （接尾語）……………

(2) 品詞の種類。

この辞典（じてん）では品詞が次のように分けてあります*5。

名詞。代名詞。動詞。形容詞。形容動詞。副詞。連体詞。接続（せつぞく）詞。感動詞。助詞。助動詞。そのほか接頭語。接尾語。連語も必要に応じてあわせかかげました。

*「連語」というのは、「ほかならない」「みるみるうちに」「もしかすると」など、二つ以上の語がいっしょになって、一つの語のようなはたらきをしているものです。

(3) 名詞とⅣ型（がた）動詞*6，あるいは名詞と形容動詞の二つの用法がある語の扱（あつか）い。

見出し語が名詞で、あとに「する」がついてⅣ型動詞としても使われる語は（名詞，～する），また，形容動詞としても使われる語は（名詞，～な・に）あるいは（名詞，～な・の）と書いてあります。

例 あい〔愛〕（名詞，～する）

あんぜん〔安全〕（名詞，～な・に）

*4,5,6 は付録「日本語の文法」をみなさい。

6 活用語の活用形の示し方など。

(1) 活用形の示し方。

動詞・形容詞・形容動詞・助動詞など、活用のある語には、活用形などが「{ }」に入れて品詞名の次に書いてあります。

動詞，たとえば「よ・む〔読む〕」では，

{①ま—ない ②み—ます ③④む(—とき) ⑤め—ば ⑥め ⑦も—う}
 {⑧⑨ん—で(だ) ⑩む—だろう}

形容詞は、

{①く—ない ②く—なる(する) ③④い(—ひと) ⑤けれ—ば ⑧く}
 {—て ⑨か—った ⑩い—だろう(かろ—う)}

形容動詞は、

{①で—ない ②に—なる(する) ③だ ④な—ひと ⑤なら—ば ⑧で}
 {⑨だ—った ⑩だろ—う}

助動詞もそれぞれの活用のしかたによって 上と同じようにその活用形が示してあります。

①から⑩による活用形の示し方は次のようです*7。

①は助動詞「ない」につづくときの形(動詞は助動詞「せる(させる)」「れる(られる)」につづく形もふくむ。)です。

②は、動詞では助動詞「ます」などにつづくときの形、形容詞・形容動詞では、動詞「なる」「する」などにつづくときの形です。

③は、そこで文が終(お)わるときの形です。

④は、名詞などへつづくときの形です。

⑤は、助詞「ば」へつづくときの形です。

⑥は、命令するときの形です。

⑦は、助動詞「う(よう)」につづくときの形です。

⑧は、助詞「て」につづくときの形です。

⑨は、助動詞「た」につづくときの形です。

⑩は、助動詞「だろう」につづくときの形です。

①～⑩によって、活用語の活用が全部示されているわけですが、動詞の活用の③、④および⑧、⑨のように形が同じ場合は、上の例の「③④む(—とき)」「⑧⑨ん—で(だ)」のように、いっしょに示しました。また、形容詞や形容動詞・動詞には、⑥、⑦がないのは、命令する形や助動詞「う(よう)」につづく形がないからです。

(2) I型(がた)活用動詞*8から作られる可能動詞*9の扱(あつか)い。

I型活用の動詞から可能動詞を作ることができるもの(「かく[書く]→かける[書ける]」「よむ[読む]→よめる[読める]」など)は、活用形を示したあとに、「(可能)」としてそれが示してあります。

例 よ・む[読む](動詞) {①……⑩……(可能)よめる}

(3) 形容詞・形容動詞につく接尾語「さ」「み」の扱(あつか)い。

形容詞・形容動詞で、語幹*2（ごかん）に接尾語「さ」あるいは「み」がついて名詞になる場合は、活用形を示したあとに、次のように示してあります。

例 あたたか・い〔暖かい・温かい〕（形容詞）

{①……⑩……（名詞、～さ・～み）}

- (4) （名詞、～する）、（名詞、～な・に）の活用形の扱（あつか）い。

「（名詞、～する）」によって動詞としても用いられることを示した語には、その活用のしかたは示してありません。動詞「する」の活用のしかたを参考（さんこう）にしないでください。

また、（名詞、～な・に）によって形容動詞としても用いられることを示した語についても、その活用のしかたは示してありません。他の形容動詞の活用のしかたを参考（さんこう）にしないでください。

*2,7,8,9 は付録「日本語の文法」をみなさい。

Ⅱ 意味・用法の説明

見出し語について、その漢字表記、品詞名、活用のしかたなどを記入した次に、その語の意味や用法が説明してあります。

- 1 見出し語がいくつかの意味・用法をもつ場合の扱（あつか）い。

見出し語がいくつかの意味や用法をもつ場合には、「1, 2, ……」と項（こう）を分けてそれぞれの意味や用法が示してあります。

「1, 2 ……」と項を分けた中で、さらにもっとこまかく分けて説明する必要があるときは、「1, 2 ……」のそれぞれがさらに「①, ② ……」と分けてあります。

- 2 意味・用法の説明のしかた。

見出し語の意味はできるだけやさしくて、わかりやすいことばに言いかえて説明してあります。

ほかのことばに言いかえただけでは、その語の意味がじゅうぶんに表わせなかったり、特に必要な文法的なことについての説明をしたりするときは、それが「／／」に入れて書いてあります。接頭語・接尾語・助詞・助動詞などは「／／」による説明だけのことが多いです。

意味・用法の説明をするのに、まだ理解できないと思われるむずかしいことばを用いなければならなかったときは、そのことばのあとに「(=)」の形で、さらにそのことばの意味が説明してあります。

- 3 参照語（さんしょうご）の示し方。

見出し語と反対の意味をもつ語、意味のよく似（に）ている語、あるいは、見

出し語の意味や用法を理解するのに、その語もいっしょにみれば役にたつと思われる語が、意味・用法の説明のあとに、「→」によって示してあります。

また、「**おおじろい→おお**（５ページ）」のように示してあるのは、「**おおじろい**」という語は、「**おお**」のところを見なさいという意味です。

Ⅲ 用 例

1 用例のあげ方。

意味や用法によって分けられた各項（かくこう）ごとに、初めに「○」をつけて、それぞれいくつかの用例が示してあります。

用例は、この辞典の中でいちばんたいせつなものです。

用例は、その語の意味や用法がよく理解できるようなものから順（じゅん）にあげてあります。特にいつも特別の語といっしょに使われるものや、文法的な面で注意が必要なものは、その用例をあげるようにしました。

用例のむずかしさ、やさしさの点からは、用例を通してその語の意味・用法がよく理解でき、また、その用例を応用（おうよう）して表現するのにも利用しやすいものをできるだけ多くあげ、あまり特別な使い方の例などはあげませんでした。

また、見出し語が活用語の場合には、その用例中になるべく多くの活用形を示すようにしました。

用例の多くは、その見出し語の使われている文の形によって示してありますが、他の語と結びついて一語となっている場合の例を示したものもあります。特に接頭語や接尾語はその例が多いです。（Ⅴ 関連語をも見よ。）語例をあげるときには、見出し語にあたる部分の意味が同じ場合には、一つの「○」のところに、つづけていくつかの語例を示したものがあります。

2 用例中の見出し語の扱（あつか）い。

用例中の見出し語にあたる部分には、その下に「——」が引いてあります。

また、見出し語の発音が、前にくることばによって変わるような場合には、（ ）の中にその発音を示してあります。

例 「**ほん**〔本〕（接尾語）」の項（こう）。

1 本（いっばん）、2 本（にほん）、3 本（さんばん）。

3 用例中の見出し語の表記。

用例中の見出し語にあたる語の表記は、次のようにしてあります。

- ㊦ 見出し語の漢字表記が当用漢字であり、しかもその音訓表で定められている音訓の範囲内（はんいない）で書かれているときは、その漢字をそのまま使

っています。

④ ⑦以外のときはかなで書いてあります。

⑦ ⑦の中でも、社会でかな書きが多くおこなわれているものは、かなで書いてあります。

4 用例中のむずかしい語句の扱(あつか)い。

用例の中に使ったことばで、理解することがむずかしいと思われるものには、その下に「~~~~」を引いて意味・用法の説明の場合と同じように、そのことばのあとに、「(=)」に入れてその意味が示してあります。

Ⅳ 見出し語の意味・用法や用例についてのいろいろな注意。

外国人がまちがえやすい例や、意味のよく似(に)ている他の語との使い分けなど、見出し語の意味・用法や用例についてのいろいろな注意が、用例のあと(関連語があれば、その前)に示してあります。

⑦ 見出し語の意味・用法の説明が、品詞の別や意味・用法のちがいなどによって、いくつかの項(こう)に分けて行なわれているとき、それらのある項にだけ関係がある場合には、その項のいちばん終(お)わりに、「／／」に入れて記入してあります。

なお、ある用例だけに関係があるときは、その用例のあとにつづけて「／／」に入れて記入してあります。

④ 品詞の別や、意味・用法のちがいなどに関係なく、その見出し語全体に関する注意である場合には、「☆」をつけて用例のあとに示してあります。ただし、「Ⅰ、Ⅱ……」「1、2…」などと項(こう)が分けられていなければ見出し語全体に関する注意でも、「／／」に入れて示してあります。

Ⅴ 関連語

見出し語と意味や形の上で関係がある語で、見出し語としては取り上げなかった語を、「(関連語)」として、いちばんあとに示したものもあります。また、用例として用例の最後に示したものもあります。その中で、①は見出し語と形の上で同じ部分のある語です。②は形の上で共通の部分はないが、意味の点で関係のある語です。

Ⅵ 小見出し

ふつうの見出し語のあとに、その見出し語と形と意味の上で関係の深(ふか)い語を、少し小さい字で、一まとめにしてあげたものがあります。たとえば、見出し

語「あお〔青〕」のあとに、「あおあおと〔青々と〕」「あおじろい〔青白い〕」「あおみ〔青み〕」「あおぞら〔青空〕」がつづけてあげてあるのがその例です。

これらの小さい字であげた見出し語は、その意味・用法の説明や用例が、ふつうの見出し語に比（くら）べて、やや簡単（かんたん）にしてあります。

また、このような小さい字の見出し語が、ふつうの見出し語の次につづけておかれたために、これらもふくめてみると、五十音順（じゅん）のならべ方が少しちがってきているところがあります。

Ⅶ 意味・用法の説明や用例などに使った漢字。

意味・用法の説明や用例などに使った漢字は、特別な場合をのぞいて、当用漢字であって、しかもその音訓表によってみとめられている音訓で使えるものだけです。そのとき、

㊦ 別表「この辞典に用いられている漢字」にあげた漢字で、その字の音訓としてみとめられている範囲内（はんい）の音訓で使うときは、原則として読みがながつてありません。

㊧ 別表以外の漢字を使ったときには、「（ ）」に入れて、その字の読み方が示してあります。

特別に、当用漢字表外の漢字を使ったり、また、当用漢字ではあっても、音訓としてみとめられていない読み方をしたりするときにも、その読み方が「（ ）」に入れて示してあります。

〔別 表〕

この辞典に用いられている漢字

団	惡	安	団	以	位	意	育	一	引	因	員	団	右	雨	運	果
家	英	映	回	界	団	屋	音	解	団	下	火	可	何	科	花	漢
感	過	夏	回	氣	海	會	絵	婦	外	各	格	學	樂	活	間	教
強	関	顔	金	銀	汽	記	期	句	議	客	九	急	去	共	京	係
計	業	局	犬	見	驗	元	苦	原	空	訓	君	団	兄	形	敬	後
口	決	結	行	向	高	校	言	合	現	国	回	古	五	午	語	妻
最	工	光	三	山	産	持	考	子	号	四	黒	今	使	団	左	詞
試	在	作	自	次	事	集	時	色	仕	七	市	始	車	私	思	手
主	紙	姉	授	秋	週	場	十	住	式	出	質	実	諸	社	者	助
小	取	種	章	上	状	正	食	心	重	信	春	所	進	書	女	人
因	少	昭	団	世	生	前	西	成	身	青	申	神	石	新	親	説
千	水	数	線	戰	全	体	然	大	政	組	早	赤	総	切	接	卒
村	川	先	多	打	對	朝	態	直	代	第	題	争	男	造	足	地
治	知	着	注	町	長	団	調	土	徒	度	通	單	定	弟	程	庭
的	天	店	田	電	南	半	都	二	入	非	東	等	当	答	頭	同
動	特	読	団	内	反	付	回	風	回	物	困	尾	必	能	表	病
配	買	売	八	発	婦	母	番	法	副	木	彼	文	每	百	平	米
品	返	変	父	夫	步	由	部	無	北	名	分	面	要	回	末	万
別	來	団	味	困	団	立	方	友	回	余	本	洋		枚	目	門
滿	例	落	約	民	理	回	無	律	旅	兩	明			団	葉	
問		連	回	利			友	和			用			類		
団				六			略	話			料					

(363字)

付 録 目 次

1	日本語の文法〔阪田・倉持〕	1
1	日本語の構文	1
1-1	構文から見た文の型——主語と述語	1
1-2	文の要素——文節	2
1-3	文節の種類および文節間の関係	3
1-4	文の中での文節の順序	6
2	品詞の種類とその特徴	8
2-1	品詞の分類	8
2-2	名 詞	10
2-3	代名詞	11
2-4	動 詞	12
2-5	形容詞	17
2-6	形容動詞	19
2-7	副 詞	21
2-8	連体詞	23
2-9	接続詞	23
2-10	感動詞	25
2-11	助 詞	25
2-12	助動詞	29
3	日本語の表現上の特性	39
3-1	文 体	39
3-2	待遇関係を表わす表現（敬語）	41
3-3	受給関係を表わす表現	44
3-4	受け身の表現	46
2	語の構成法〔西尾〕	48
1	ことばの組み立て	48
2	複合語 ふくごうご	48
3	派生語 はせいご	50
4	漢語の組み立て	51
5	音声上の変化	52

6	その他	53
3	親族（しんぞく）関係のよび方〔浅野〕	54
4	数えることば〔水谷〕	55
	助数詞一覧表	56
5	コソアドについて〔鈴木〕	62
6	擬声語・擬態語について〔木村〕	64
7	漢字音訓表〔高橋〕	88
8	索引	124

ああ (副詞)

あのように。あんなふうに。あんなに。
／相手も知っていることについて使うこと
ば。／ →こう。そう。どう。

- あの人もああいそがしくては本を読む
ひまもないでしょう。
- ああなったのもごしょうちのように家
庭が悪いからです。
- ああまで(＝あれほど)わがままだと
は思いませんでした。
- ああして、こうしてといちいち教えな
ければならない。
- ああでもない、こうでもないというさ
くてこまります。
- ああいう人は結局何をやってもだめだ
ろう。

あい[愛] (名詞, ～する)

{ ①さ—ない ②し—ます ③④する(—とき) ⑤すれ—
ば ⑥せ—しろ(せよ) ⑦し—よう ⑧⑨し—て(た) }
⑩する—だろう

→にくしみ [憎しみ]。にくむ [憎む]。

- 1 人や動物をすきだと思い、かわいが
る、またはたいせつにする気持ち。
／夫婦でない男女が、相手を男または女
として愛することを「恋愛(れんあい)」
と言い、その気持ちを「恋(こい)」と言
う。／
○子にたいする母の愛ほど強いものはな
い。
- わたしは、あなたを愛しています。
- 彼は、友人のだれからも愛されてい
る。
- 彼女は、夫の愛をうしなってしまっ
た。
- ふたりは、たがいに愛し合っている。
- 自分を愛するように他人を愛しな
さい。
- 神の愛。男女の愛。親子の愛。
- 2 もののねうちをみとめ、たいせつにす

る気持ち。

- 自然を愛しましょう。
- 花を愛する人は、悪い人ではない。
- 学問への愛は、ますます強くなった。
- 国を愛するのは、自然の気持ちです。
- 愛児(あいじ)。愛犬(あいけん)。愛
国心(あいこくしん＝自分の国をたい
せつにまもうとする心。)

あいかわらず [相変わらず] (副詞)

前と同じように。いつものとおり。

- 銀座(ぎんざ)は相変わらずにぎやか
です。
- 私は相変わらず元気ですから、ご安心
ください。／手紙のことば。／
- こつしも相変わらずよろしくおねがい
いたします。／新年のあいさつ。／
- けさも電車は相変わらずこんでいた。
- 「おとうさんのご病気はいかがです
か。」「ありがとうございます。相変わ
らずです。」
- ／「～の」の形で、形容詞的に使われる
こともある。／
- 相変わらずのひどい生活だ。

あいさつ [挨拶] (名詞, ～する)

- 1 人と会ったとき、れいぎとして言うこ
とばや行なう動作。
- 村の人は毎朝、みちで会うとあいさつ
をする。
- 受付の人にあいさつして事務所(じむ
しょ)へはいった。
- ふたりはたがいにあいさつをかわし
た。(＝おたがいにしあう。)
- あいさつをぬきにして(＝しないで。) 相
談を始めた。
- 「こんどおとなりへこしてまいりまし
たので、ごあいさつにうかがいまし
た。」／ていねいに言うときは「ご～」
と言う。／